

古代の山持遺跡 —大型の道路遺構と出土した文字資料—

古代の山持遺跡では道路遺構や条里に基づく水田の畔や畠などが見つかっています。そのうちでも6区では大型の道路遺構が見つかっています。この道路遺構は、東西方向に流れる古墳時代以降の川を渡るように南北に構築されたもので、土橋状の部分は幅3~3.5m・高さ1mに作られており、調査区内で確認された全長は46mになります。この道路を造るために付近から人頭大の石や土砂が集められ、道路を造る材料とされました。また、建物に使われた建築材を再利用した杭を何列も打ち込んで造っているなど、頑丈にするために様々な工夫が施されていました。



道路遺構の土橋状の部分(6区①)



道路遺構の土橋状の部分(6区①)



道路遺構の下部に置かれた石材と杭(6区③)



道路遺構(6区③)



道路遺構の法面に貼られた石材(6区①)



道路遺構の下部に置かれた石材と杭(6区③)



道路遺構周辺で出土した土器



道路遺構全体図(黄アミ部分)



道路遺構に使われた建築材(垂木)

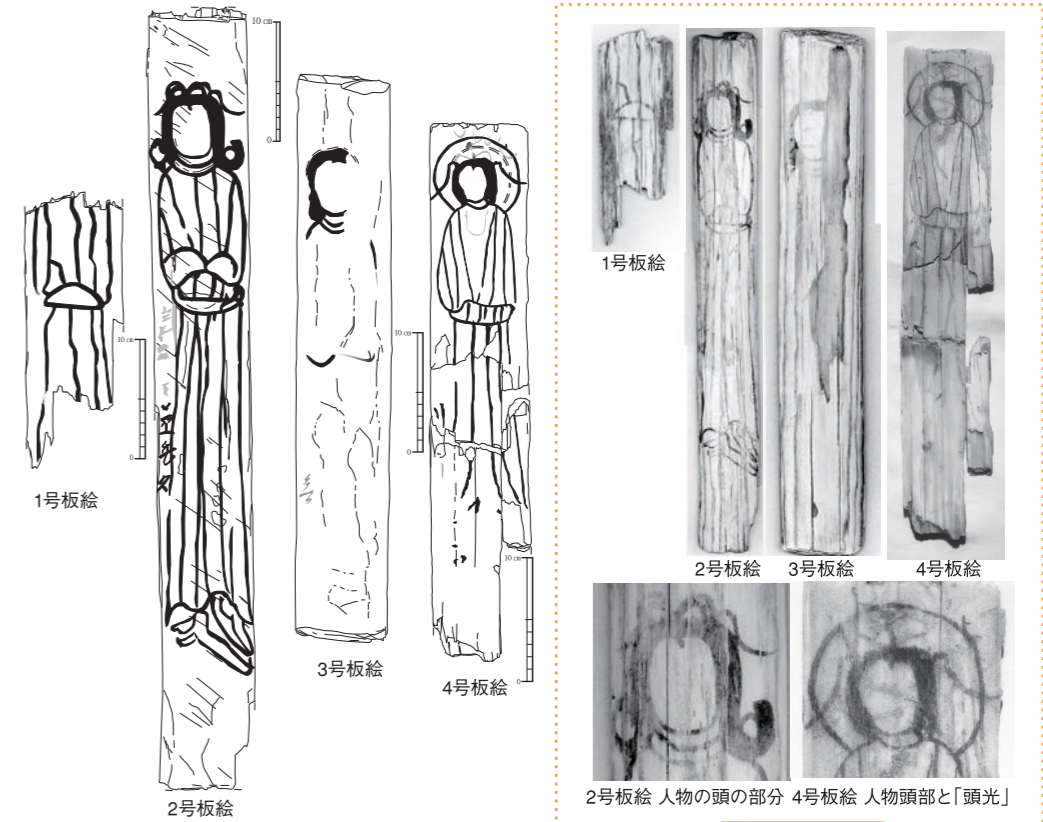


道路遺構周辺で出土した鉄器(紡錘車・鋤・短刀)



道路遺構周辺で出土した木製の皿と曲物

出土した4点の板絵

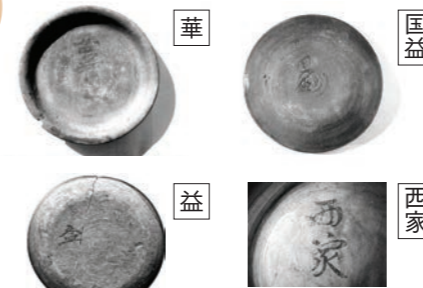


道路遺構の周辺からは8世紀後半から9世紀初頭と思われる4点の人物を墨書した板絵が発見されました。これらは全国的にも類例の無いもので、その詳細な性格は未だ明らかではありません。4号板絵は、女性であることや「頭光」から「吉祥天」を描いた可能性があるものです。そうであれば仏教祭祀に深く関わるものであった可能性が高く、仏教が地方に浸透する様子を知る上で重要な資料であると考えられます。

発見された文字資料

道路遺構周辺からは木簡や墨書された土器が見つかっています。これらのうち1号木簡や墨書土器は道路遺構と深い関係がある可能性があるものです。これらには、当時の人々の名前や地名が多く記されています。

墨書土器



墨書土器「華」「国益」「益」「西家」

木簡



1号木簡には「福丸」、「男丸」等の人名が、2号・3号木簡には地名(伊努郷、神戸(郷))と人名(若倭部□□、額田部□問)が記されている。

古代の山持遺跡 一条里と水田、畠

遺跡からは古代の条里の痕跡が確認されています。6区と7区では南北方向に水田の畔が確認されており、その間隔を測ると約110mと規則的なものでした。これはほぼ当時の1町(109m)に相当することから古代の都市計画(条里地割)に基づいたものと考えられます。また東西方向に見られる畔も確認されており、南北方向の畔と直角に交わることから、これも条里地割に基づいたものと思われる。これらの規則的な畔は古代末頃のものと考えられ、一部は現在の地割にも引き継がれています。

古代の遺跡周辺は4区で確認されているように畠であったり、各調査区の堆積層から想定される水田であったりと耕作が行われる場所であったと考えられます。



東西方向の畔の断面(6区①)



南北方向の畔に打たれた杭(6区⑤SX01)



6区③・⑤の道路遺構



6区⑤で確認された道路遺構

6区では盛土で構築された道路遺構のほかに「波板状凹凸面」とも呼ばれる連続した浅い穴や土抗による道路遺構が何列も見つかっています。このあたりが南北方向の主要道路が通る場所であったことがわかります。



畠の畝間溝(4区①)

古代末から近世の山持遺跡 湿地と巨大卒塔婆群

遺跡の周辺は古代末頃から湿地に変わったと考えられます。調査では厚く堆積した腐植土(通称「オモカス層」)が全域で見られることから、広い範囲で湿地化したものと考えられます。湿地化した後、近世には水田に利用され、そこに伊努谷川が流れている現在に近い景観になったものと考えられます。

中世には一部狭い川も流れていたようで、2区では川の跡やそこに設けられた堰が見つかっています。また1区や2区では近世の水田跡やそれを覆う洪水による砂礫が見つかっています。これらは近世の文書に見られる幾度かの大規模な洪水の痕跡である可能性が高いものです。



オモカス層から出土した遺物(木製椀・土師器・鉄鎌・鉄鍬)



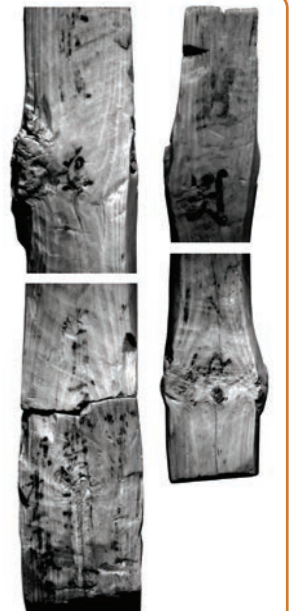
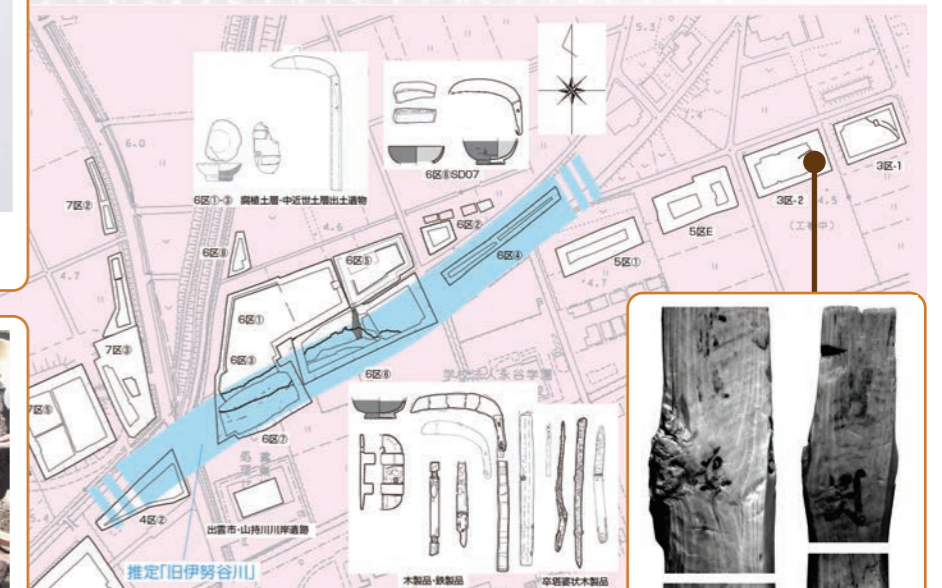
中世の川跡に設けられた堰(2区)



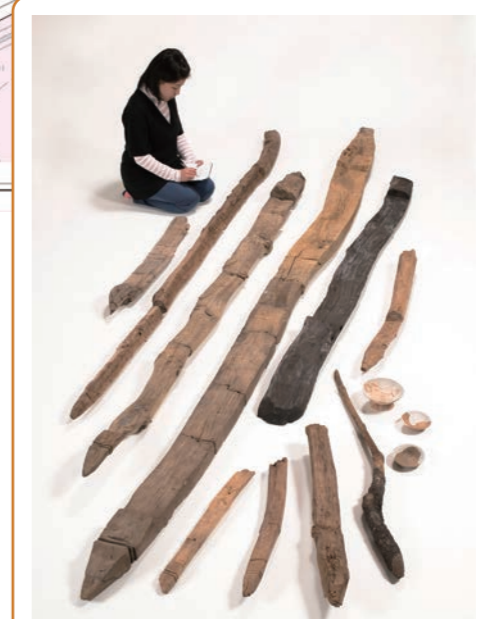
洪水砂の下から現れた近世の水田跡(2区)



卒塔婆の出土状況(3区)



柱状卒塔婆の赤外線写真(3区)



中世の湿地跡から発見された巨大卒塔婆群

遺跡からは死者の供養のために作られた卒塔婆が発見されています。それらのほとんどは丸太の一部を平らにして墨書した柱状卒塔婆と呼ばれる種類のもので、2区からは全長4.2mと国内でも最大規模の大型の卒塔婆が出土し、年代も国内最古級の可能性があるものです。これらの卒塔婆は湿地の周辺部や川のほとりに立て並べられていたものと考えられます。

山持遺跡が語る地域の歴史

発掘調査でわかったことのうち、この地域の歴史を考える上で特に重要なことをまとめます。

弥生時代・古墳時代

- 弥生時代中期(紀元前1世紀頃)に人々が暮らし始めたこの集落は、幾度も斐伊川の水害にさらされながらも、そのたび再建され、古墳時代中期(5世紀)までの約600年間以上に渡り続きました。弥生時代中期末～古墳時代初め(2世紀後半～3世紀前半)には、出雲平野を代表する対外交易拠点の集落として、日本列島はもとより朝鮮半島の各地とも交流を持ち、最盛期を迎えました。
- 建物は、掘立柱建物しか見つかっていないことや、建物の基礎に沈下防止の工夫がこらされていることなど、水辺のムラに暮らす人々の工夫がありました。
- 膨大な出土品の中には、木製品や漆、朱、玉類の未成品があり、ここでこれらの生産、加工が行われていたことがわかりました。また、多くの種類の木製品とその未成品が出土し、当時の木材利用のありかたや木工技術の高さを知る手がかりとなりました。

古代[奈良時代・平安時代]

- 奈良時代の後半には東西方向に流れる小河川を横断するように大型の道路が造られ、これと相前後して大型道路の東側にも波板状凹凸面による道路が数時期にわたり造られています。これらの道路は当時の神門郡と出雲郡を行き来する主要な南北道であった可能性が高いものです。
- 大型の道路の周囲からは板絵4点、木簡3点をはじめとして墨書土器を含む須恵器・土師器、曲物・皿等の木製品が出土しています。特に板絵4点は仏教祭祀に関わるものと考えられ、当時の仏教の浸透を窺い知ることができる重要な資料となりました。
- 道路遺構の周辺からは集落が見つからないことから、当時は水田や畠が広がっていたと考えられます。10～11世紀代には、古代の都市計画である条里に基づいて1町(109m)単位で大きく水田が区画されていることが明らかとなりました。

中世～近世[鎌倉時代・室町時代・江戸時代]

- 古代末～中世初めには、一帯は広大な湿地となりました。湿地や川岸では、柱状の卒塔婆を立て並べ死者への供養が行われていたことが明らかとなりました。遺跡からは日本最大級の巨大な柱状卒塔婆が見つかっています。
- 中世後半になると湿地は水田として開発されました。発掘された水田跡は、斐伊川の洪水による砂礫に幾度も覆われたことが確認され、当時の文献に見られる斐伊川の洪水の様子が具体的に明らかとなりました。

山持遺跡関連年表

時代	発見されたもの	山持遺跡のうつりかわり
江戸時代 室町時代 鎌倉時代	水田跡・卒塔婆 陶磁器・木製品	江戸時代には水田として利用される。 鎌倉・室町時代には湿地が広がり、周辺には卒塔婆が立てられていました。
平安時代 奈良時代	道路遺構・条里遺構 水田・畑跡・板絵 木簡・木器・鉄器 土師器・須恵器	奈良・平安時代には水田や畠として利用されました。南北に通る立派な道路も造られていました。道路の周りからは、須恵器・土師器の他に板絵や木簡が見つかっています。
古墳時代	掘立柱建物・大溝 井戸跡・ガラス玉 土師器・須恵器	古墳時代には集落が営まれ、そこで使われた勾玉やガラス小玉といった玉類や大量の土師器が見つかっています。
弥生時代	掘立柱建物・河道跡 堰・弥生土器・木器 楽浪土器	弥生時代には集落が営まれ建物が見つかっています。見つかった土器には朝鮮半島、九州、近畿地方など他地域のものがあることから幅広い交流を行っていたことがわかりました。
縄文時代	縄文土器 石器	縄文時代の土器が見つかっていますが、おそらく周辺で使われていた土器が川によって流れてきたものと思われます。